

## 第一章

### 波瀾万丈人生の幕開け

働き盛りの四十六歳のとき、私は過労死体験をしました。それは今から十二年前、一九九七年四月のこと。三途の川まで行って、あの世を見てきました。あちらは嵐が吹き荒れる暗黒の世界。それに引き換え、こちらには桜吹雪が舞う春うらら。この世の方がはるかに住み心地は良さそうです。それなのに私は急き立てられるように、向こう岸に向かって小舟を出しました。夢の中で誰かが叫んでいる声が聞こえます。「こんな、嵐の日に出掛けるのはやめて……天気が

回復してからにしないよ」と。そして、ロープが投げられ、私が乗った小舟はこちらの岸に引き戻されました。奇跡の生還を果たした瞬間です。

このとき救急搬送された先は、千葉県救急医療センター。救急隊員による「三次直送」という声が耳に残っています。その判断が生死の分岐点だったと思います。三次というのは、後で知ったことですが、「第三次救急医療施設」であり、高度救命救急センターを意味しているということでした。病名は、「急性大動脈解離」。心臓から全身に供給される血液の通り道の大動脈が裂けてしまう病気です。この第一次発症が発端で、その半年後の十月には緊急手術を受ける事態に発展しました。心臓の出口の大動脈弁は閉鎖不全に、さらには大動脈の解離が他の部位にも進行し、ほとんど心肺停止状態に陥ってしまったからです。

およそ〇時間間及び手術で救命はされたものの、心臓機能には著しい障害が残りました。外見上は元気に見えますが、実は、身体内部はボロボロ状態なのです。大動脈弁は、機械的な人工弁に置換され、破裂寸前だった上行大動脈も人工血管に置き換えられました。私は、人工弁によって生命が維持されているため、一種二級の身体障害者でもあります。

あれから十二年の歳月が流れて行きましたが、これが私たち家族にとつては空前絶後の、「波瀾万丈人生の幕開け」となったのです。

## 第二章

### 私自身の手術体験

前述の人工弁置換術に伴い、各種降圧剤だけでなく抗凝結薬療法としてのワーファリンの服用が開始されました。原因は定かではありませんが、その後一九九九年十二月には、脳血管疾患の「椎骨脳底動脈循環不全」を発症。二〇〇三年月から二月にかけては「慢性硬膜下血腫」という合併症も出現。頭の手術を二度も受けることになりました。

十二年前の第二回目の手術以降、残存解離部分の大動脈については、半年ごとにCT検査などによる経過観察が行われています。通常、健康体の方の大動脈は直径がおよそ二〇mmから二五mm程度ですが、私の場合、最初の解離で約四〇mmに拡大しました。その後解離した大動脈は、血圧コントロールの甲斐もなく一年に数ミリずつ拡大を続け、二〇〇五年三月には破裂の危険が高まったため、腹部大動脈の人工血管への置換術が施行されました。

あくまでも一般論ですが、解離性大動脈を発症した患者は、直径が六〇mmを超えると破裂の危険性が著しく増大すると言われています。大動脈が破裂したら、奇跡に次ぐ奇跡を乗り越えてきたこの命も、その瞬間終焉のときを迎えることとなります。残存解離部分の大動脈はその後も

拡大を続け、昨年(二〇〇八年)七月には直径が五五mm程度になっていることが判明しました。主治医の先生からは、「このままの状態では何もしなければ、余命は一年ほど。もしかしたら、この冬を越せないかも知れません」と厳しい宣告を受けた次第です。このような経緯を踏まえて、昨年十二月、ついにリスクの大きい下行大動脈の置換術が施行されました。これが、全身麻酔による五回の手術でした。

この手術のイメージが想像以上に大きく、今度は声帯を司る神経(反回神経と言いますが)の状態のことを言うのだと思います。声が出ないだけならまだしも、飲食物を誤嚥する事態も頻発するため、このままでは肺炎を併発しかねません。そこで、つい最近、二度にわたって、声帯の手術を受けたのですが、残念ながら元の声を取り戻すことはできませんでした。本日の体験発表については、音声障害のため大変お聞き苦しいものと思われまます。そのような事情を、ご容赦いただければ幸いです。

しかし、私には、どのような身体的状態になろうとも、生き続けなければならない理由があるのです。続けなければならない理由が……

## 手記

秋山光夫さん(千葉県在住)

# 「生あるは

# 献血のおかげ」

●第一章 波瀾万丈人生の幕開け

●第二章 私自身の手術体験

●第三章 息子の病氣と手術

●第四章 献血への感謝の気持ち

## メッセーヅ特集

このコーナーでは、「千葉県献血感謝のつどい」(平成二十一年十月二十八日開催)の席上、「自分の輸血経歴を基に、献血の必要性をお話しいただきました秋山光夫さんの手記をご紹介します。

## 第三章

### 息子の病氣と手術

私が闘病生活を送っている中、二〇〇二年九月、信じられない出来事に遭遇してしまいました。当時二十八歳、まだ結婚後間もない息子(長男)が私の後を追うように「急性大動脈解離」を発症したのです。緊急手術で命は取り留めましたが、何の因果か私と同じように若くして身体障害者になってしまいました。

それからというもの、私と息子は毎年のように交替で入院手術を繰り返しています。息子は、最初の発症から四年後の二〇〇六年六月に腹部大動脈置換術、その翌年の二〇〇七年一月に下行大動脈置換術を受けました。とりわけ、二〇〇七年の手術は壮絶を極めるもので、術後の二十日間は集中治療室で植物人間のような日々を送ることになったのです。主治医の先生からは、手術中に脳梗塞を発症したことも告げられ、たとえ救命されたとしても何らかの障害が残ることも覚悟させられる事態になりました。

そのような状況下、肺炎を併発したため、意識が戻らない中で再度の手術を施行。さすがに、このときはばかりは私たち両親も「もうダメか?」と諦めかけたものです。しかし、毎日、午前と午後のお

会は欠かさず、そのたびに息子の手足を擦りながら、「死んではダメだよ。眼を覚ましてくれ。そして生きてくれ」と囁き続けました。

私たちは両親は、息子がたとえ寝たきりになったとしても、「生きていてくれるだけで良いから……」と、ただただ祈り続けたのです。生きてさえいれば、私たちが息子の手となり、足となり、目や耳や口になって支えていこうと約束をしました。

そして迎えた術後二十一日目、奇跡が起きました。突然、息子は三週間の昏睡状態から目覚めたのです。そのとき、わずかながら手足を動かし、問いかけにも多少反応してくれました。千葉県救急医療センターの先生方も、息子の意識を確認し、「ここでやっと「救命宣言」をしてください。」

それからの息子の回復ぶりは目覚ましく、意識を回復してから二ヶ月後には職場復帰を果たしました。幸いなことに、致命的と言えるような後遺症も残りませんでした。これも奇跡です。息子が私の後ろ姿を見ていると思うと、私は父親として、また同じ病氣の先輩として、これからの人生、病氣と闘い続けていかなければなりません。これが、私の生き続けなければならない理由です。

## 第四章

### 献血への感謝の気持ち

これまでお話させていただいたように、私と息子は何度となく死の淵をさまよいますが、その都度奇跡を乗り越えて今こうして現在を生きています。いえ、自分の力で生きているわけではありません。今回の「千葉県献血感謝のつどい」の機会に接し、私は、尊い献血をしてくださった皆様方によつて生かされている、ということを感じさせられました。

私の手術時の輸血量は、赤血球：六単位、凍結血漿：二〇単位、血小板：二〇単位ということでしたので、単純計算では延十五名の方々に合わせて五〇〇〇mlを超える献血を頂戴したことになるそうです。これとは別に、息子の手術時の輸血量は大変なものでした。赤血球：六四単位、凍結血漿：七八単位、血小板：五〇単位というところで、こちらは延七六名の方々から合わせて二八〇〇〇mlもの献血を頂戴したことになるお聞きしました。それぞ

れの輸血量を合算すると、私たち親子は、延九十名の方々から、三三三〇〇mlという、気が遠くなるような貴重な献血を頂戴したことになります。

私は体内の血液が一回入れ替り、息子は七回も入れ替わるほどの大量輸血を受けたことを知らされたとき、私はただただ驚くばかりでした。私たち親子は、善意の献血のおかげで命が救われ、今、こうして生かされています。私たちは、献血にご協力くださった大勢の方々の顔を思い浮かべながら、これからの人生を大切に生きていくように努めます。

今もどこかで、献血のおかげで命が救われている方々がいると思います。また、闘病生活を余儀なくされている方々もいらっしゃるでしょう。私は、このように健康を取り戻しつつありますが、それも、尊い献血があったればこそ、との認識を深めることができました。

最後になりますが、私は、尊い献血を頂戴したのもので、そして、病と闘っている方々を代表して、献血にご協力くださった皆様方、さらには献血推進に関わる全ての方々に心から感謝の言葉を申し上げます。ありがとうございました。



秋山光夫さんの体験発表